

【JKギャルユキちゃんの耳舐めリフレクソロジー】

※一部本編と異なる場合がございます

「ぱちぱちぱいす」

「JKギャルユキちゃんの耳舐めリフレクソロジー」

//インストロダクション

「あなたが耳舐めリフレクソロジーで指名したのはJKギャルのユキちゃん。」

「積極的なユキちゃんの言葉攻めからの耳そじ」と耳舐めに徐々に興奮へと導かれ、オプションコースの手コキフェラで興奮度MAX射精。」

「そりに禁断の特別サービス、ゴムなし生ハメえつちのフルコース。」

●トランク1

「はーい、！」指名ありがとうござりまーす

「ヒーリングリフレ、『ペステル』へようこそ♪

「本日お相手させて頂きます、ユキでーす」

「……なーんて、固つ苦しい挨拶、いらないよね？」

「お兄さんも、緊張してないで楽にしてよ。何か飲む？ お酒も一応あるけど」

「なーにい？ お兄さん、もしかして緊張しちゃってる？」

「」「うお店は初めて？ ヘー、じゃあユキが初めて、もーちゅうんだね」

「にひひ……初めてがユキでいいの？」

「……初めての相手が、ユキだったらあ……お兄さん、他の女の子じゃ……満足できなくなっちゃうかもよお……？」

「なーんてね。ふふ、そんなに怖がらなくてもいいって。もう、可愛いなあ」

「えーっと、最初にね。お店のシステムについては、ちゃんと聞いてるかな？」

「うんうん、ならよかったです。初めてだと、結構戸惑っちゃつたりするもんね」

「ユキもね、初めて行く美容院なんかだと、お店によって結構システム違つたり……」

「……なんて、男の人はそんな話聞いても面白くないよね、あはは」

「それじゃあ、最初にちょっとだけ、確認しちゃうね」

ユキ

「お店のシステムについては分かつてもらつたるかな？ 受付でちゃんと聞いてると悪いナビ…うん、なら良かった」

「えつと、『ースはイヤーマッサージ、オプション付き…』

「わお、お兄さん、オプション付けてくれたんだ♪」

「ありがとう♪ 今日は頑張って、楽しませてあげるからね♪」

「ううかさ、お兄さん真面目そうなのに、よくウチの店のオプションなんて知つてたね」

「常連さんでも、一部の人しか知らないのにさー」

「お兄さん、可愛い顔して、結構そういうの、好きなんだ?」

「あつ、ううん。全然軽蔑なんてしてないよ。ユキは、自分をそういう風に見てもらえると嬉しいし……♪」

「えー、お店のホームページでユキの「」と見てから、色々調べてくれたんだ?」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「そこまで熱心に思つてくれてるなら、期待は裏切れないなー。フレッシュヤーかも、ふふふつ」

「そんじゃ、お荷物と上着預かるから……うん、お兄さんは、そこのベッドに座つててね」

「軽く準備しちゃうから、ちょっと待つてね」

「ふふつ、もう我慢出来なさそうな顔してるう。でも、ね……」

「焦らされた方が、あとでずっとずっと……気持ちよくなれるよ……」

「ふふ……あはは、なんだか嬉しいなあ、お兄さんになんに求められちゃうなんて」

「うふ、ユキ、やる氣出できた。今日はいっぴいいっぴい、お兄さんの」と楽しそうにあげるから、ね……「ふふふ……」

●イリュック

「んじゃ……準備しゅーりょー」

「お兄さんは大丈夫かな？ んー、なんかムズムズしてる？ もう、待ちきれない？ ふふふ……」

「よじょいと」

ユキ

「そんじや、早速始めちゃおつか?」

「なあに? いざ始めるとなつたら、緊張してきちゃつた?」

「なにそれー、お兄さんちょいと可愛すぎじゃない、くふくふ?」

「くーキくーキ、やつてる内にリラックスするか? りそ、ほりほり、早く横になつて?」

「え? うー、ユキの太ももの上、だよ?」

「ふふ、まーた顔赤くなつた。お店に来るまでは積極的だったのに、根っこはウブなんだね」

「大丈夫……ユキに任せで……」

「すぐに、お兄さん」と……心の底まで安
心させてあげるから……♪

「うふうふ、なーんにも、恥ずかしがる」となん
て、ないんだよ……?」

「ただユキに任せてくれるだけだ、お兄さんは気
持ちよくなれるんだから……全部、全部任せ
て、ね……ほりほり」

「ユキの太ももの上……早く来て?」

「ふ、いっすいっす……♪」

「ふにふに、ふにふに～」

「ふふ、お兄さんの耳、もう真っ赤になつて、すつ」「熱くなつてる」

「それに、すつ」い柔らかくて……なんか、子猫ちゃんでも触つてるみたい、くすつ」

「こんな立派な男の人なのに、こんなに可愛いくなつちやうなんて、なんだか不思議だねえ」

「ふん、ふん……ふにふに、ふにふに……ふふ、なんだか触つてるの、樂し……ふふつ、なんだか、やめられなくなつちやう……ん、ん……」

「ん……触つてる内に、緊張もほぐれたかな?」

「ならよかつた。それじゃあ、続きもお……」

「耳かきも、始めちやつて平氣、かな……?」

「うそ、よかつたあ。それじゃあ、耳かき、始めさせてもらうからね?」

「あ、ちょっと待つて……今、用意するから」

「ん……ん……っしょつと。あつたあつた」

「ふふふつ……」の、耳かきでえ……」

ユキ

「お兄さんの中、たくさん、気持ちよくしてあげるね……?」

「ふふ、それじゃあ、始めるから……身体の力抜いてください……」

「中、入っちゃうからねえ……動いちや、ダメだよお……」

「ん、ん……いい子いい子……ユキの『いつ』とを
ちゃーんと守ってくれて、お兄さんはいい子だ
ねえ……」

「んー……んう……中、結構綺麗にしてるんだ
ねえ……」

「見た目もだけど、身体もちゃんと清潔にしてる
んだねえ……えらいえらい……」

「だけど、自分以外の手で……コリコリ……って
してもいいと、気持ちいいでしょ?」

「えへへ……ユキも、よく友達なんかと遊びで
やつたりするんだけど……」

「女同士なのに、ガチで恋しちゃいそうになつ
ちゃうの……ヤバいよね、耳かき……」

「あ、変な勘違いしないでね、ユキはノーマル、
ノーマルだから……!」

ユキ

「うと、いけないいけない。敏感など」「うお掃除してるんだから、集中しなきやね」

「ん……奥の方は、やつぱ自分じや出来ないから少し溜まつてるみたい……だね……」

「おつけ……そんじや、ユキが綺麗にしてあげるからあ……そのまま……動いちやダメだよ……」

「ん、しょ……ん、んう……ん、はあ……んつ、んう……んんう……んつ、んつ……ん、は……ん、ん……んうう……」

「お……お……お……やつぱ、溜まつてるねえかす度に、サクサク、サクサクつ……先つぽに伝わつてぐるう……」

「にひひ……お兄さん、どう……？ 気持ちいい？ うて、聞かなくとも分かるくらい、顔ふにやふにやじやん、くすつ……」

「うん……上の方の小さいのも、！」のまま綺麗にするか「ね……はあ、ん、ふうう……」

「ん……ん……ふう、ん、ふう……んう……んつ、んつ……ふう、んつ……はあ、ん、はつ……」

「ふうう……ん、よし、とお……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「こ」れでこっちのお耳は、綺麗になつたね

「それじゃ、仕上げさせてもううよ……次は、梵天を使うからね……」

「とんとん、とんとん……」

「こ」つともねえ、気持ちいいよね。ちょっとくすぐつたいんだけど、それがまた癖になる感じで……」

「あよつと、強めの方がいいよね。かるーくだと、むず痒くなっちゃうもんねえ……」

「ふふ、ふん……、ふふつ、ん、ん……」
「しょ、こ」しょ……んつ、ふふつ、んひひ……」

「うううん……うん。こ」ちはピカピカ、だね。
うふふ、お兄さん、すっかり気持ちよさそうな顔しちゃつてえ……」

「ユキも、楽しかったよ……ホントこ」れ、男の人すーぐ虜になつちゃつてしま、癖になつちゃいそ……」

「ん……、んふふ……そ」うだね、反対側はまだ、だもんねえ」

ユキ

「ん……、んふふ……そ」うだね、反対側はまだ、だもんねえ」

ユキ

「心配しないでも、いいよ……がんばり、ちゃんと
してあげる……」「うそ、したい、から……えへ
く」

ユキ

「そんじゃ……」いか向いて? ぱりぱり、わ
しないと、反対側出来ないでしょ?」

ユキ

「まつた恥ずかしがつちやつて……もお、本当に
可愛いんだからあ……」

ユキ

「そんじゃあ、無理矢理……」「うーん、つてして
あげちゃうからねえ……♪」

ユキ

「はい、」「うーん……」「ふふ、お兄さん、全然抵
抗しなかつたじゃん?」

ユキ

「もう抵抗出来ないくらい、とるーんつてし
ちゃつてるのかな……えへへ、お兄さん、よわ
よわだね~?」

ユキ

「正方の耳だけそんなんだなんて、こいつわかれ
ちゃつたり、どうなるかなあ?」

ユキ

「いひひ、ちょっと楽しみになつてしまつた……
……ふふふ、今すぐに、しちやうからねつ……」

ユキ

「それじゃあ、始めちゃうから、ね……ん、ん……
……んふう……」

「うふ、ほひ……耳かき、中にい……入つていいくよお……」

「お兄さんの身体、ゾクゾクして震えちゃうてえ……なんかや、りしーねえ?」

「女の子にお耳掃除されて……もしかして、感じちやうてるんだあ……?」

「ハハハ……く・ん・た・い、むふ……」

「なに……悪口言われてるのに、お田々がまた、とねーん、つてしてきちゃつたね?」

「畠葉とお耳掃除だけで、そんなえつちな顔になつちやうんだあ……ホントに変態さん……♪」

「もお……まだ始まつたばかりなのに、こんなになつちやうお密さんなんて、初めてかも……」

「やつぱり、お兄さんは思った通り……ユキのちょ一好みのタイプだよ……うふふ……」

「それじゃあ、」うちのお耳も……じつへつお掃除してあげるからあ……」

「むずむず~つてするの、たくさんたくれん、味わつてね……んぶ、ん……」

「ふう、んひ……んう、んひ……はあ、んふ……
……んひ、はあ……んひ、んひ……」

「もひと、奥も……コリコリ……してあげ
るから、ね……」

「ふふ……自分以外の手で……奥の方イジられ
るとお……なんだかむずむずしちやうよね……
…」

「それが、なんだか癖になつちやうんだけどねつ
……お兄さんも、わい悪うよねえ……?」

「ふふ、お返事聞かなくとも、分かるよ……顔、
もひつ真つ赤で……目もぼやーん、つてしちやつ
てるもんね……」

「うん、それじゃあ……奥の方、いつぱいイジつ
てあげるね……んふ、ん……んんう……」

「はあ、んひ……ふうう……んひ、んひ……ど
う、かな……お兄さん……気持ちいい……?
う、う……」

「んひ、んひ……気持ちよくても、動いちやダメ、
だよお……危ない、からね……じつくり、
味わつて……はあ、ん、ふうう……んんう……
…」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

古
非

「ふう、ふう……くうう、うう、ん……うん、これで、キレイに……ん、なった、ね……んんう

「もお……お兄ちゃんが気持ちよれやうにしよ、まだ
からあ……」キモジキモジキモジやつたじやん
……………」

「お兄さんの反応、エロすぎ……うふふ、ただ耳かきしてただけなのにねえ？」
「そんじゃ、こつちも梵天で、仕上げしてあげますね♪」

「ふんとん、とんとん……改めて見るとお……お兄さんのお耳、真っ赤だねえ……」

「ユキも興奮しちゃつたから、同じくらい真っ赤になつてゐかも……うふふ、ちよびつと恥ずかしいね……」

「それじゃあ、仕上げ……いいや」

卷之三

「ふふ、これ……ゾクゾクしちゃうよね……いいんだよ、もっと身体震わせててもお……」「

「それじゃあ、耳かきは、おしまい。楽しんで
もりえたかな、ユキのお耳掃除」

「つい、露骨に残念そうな顔してると……」

「大丈夫大丈夫……イヤーマッサージコースは、
「」からが本番……だから、ねつ♪」

●トラック3

「それじゃあ、イヤーマッサージコースの、お樂
しみ……今から始めちゃうから、ね……」

「お兄さん、トロトロになっちゃうてるけど、立
てるかな~。うふふ……」

「うん、そしたらセ……ユキに、身体預けてくれ
る、かな……?」

「ちっちゃな子供みたくないっちゃったみたいにい
……ユキに、全部預けちゃっていいよお…
…?」

「あはあ……素直だね、お兄さん……少しも恥ず
かしがつたりしないんだあ……」

「うん、ユキね……そんなお兄さん、好きだよ…
…あたしも、気持ちいい」と大好きだもん…
…」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「早く、沢山氣持ちよくなりたいもんね……いいよ、したげる……！」

早く、沢山気持ちよくなりたいもんね……いいよ、したげる……！」

「ペニッ、れひお……」

「ふふふ……お呪わざ、『クシ、ウド』ぢやつたねえ……」

「まだ心の準備、出来てなかつた？ それとも、耳かきで敏感になつてゐのかなあ……」

「休憩、してもいいけど……ユキは、お耳でいつ
ぱい感じてる、可愛いお兄さんが見たいなあ…
…♪」

「ね、」のまま……続けていい……？」

「いいの? やたつ、えへへつ……それじゃあ、始めちゃう、からね……」

「まずはあ……」の、真っ赤になつた、耳たぶを

ん、からあ……」

「ああ、ん、んああ、ふふ、ふふ、」

「えく……ちゅむ、ちゅう……お兄ちゃん、充血して……ぱつぱつしてた」「

「果物でも、食べちゃつてゐみたい……んんう……ペロペロ、たのしつ……」

「んふう……ふうう……」れだけじゃ、物足りないよね……ユキは、物足りないよ……

「はあん、んつ、ぶつ…………もつと、深いと…………」
「中も、したげるから、ねつ…………んやう…………」

「お母の、中……はあ、はあ……じつぱんペロペロ……
口……しておさるか、ひつ……はああ、んうう……
」

「はあ……んう、ふああ、んうう……お兄さん
の、味、におい……」

「ジーハーしてだる、他の人で感じたことないぐら
い、あたし、ドキドキしちゃつてるよお……」

「はあ……はあ……お兄さんの身体、えつちすぎる
るよお……」キ、こんなに興奮しちゃつてる…

「ね、ね…………すうひ「ごだぎ」してゐるの…………背
中から、わざわざつけてくる、でしょ……」

「えへへ、うふふ……おっぱいの奥から、ドクン
ドクン、ってお兄さんの背中に、……伝わって
るでしょ……」「

「ふう、んぐう……はあ、ああん……」めん
ねつ、我慢出来ないの……」

「もつ片方の耳も、たぐれん……味あわせつい……
……んぐう、んううう……」

「すーひ……すんすん……はあ、くうん……」

「お兄さんの、すっかり興奮しきった、オトコの
人のにおい……」

「あは……嗅いぐるだけ、で……ちょいと濡れて
あちやつたかもお……」

「お兄さんのオスの匂い、でえ……ユキのおまん
い、濡れあやづよお……」

「さあ、ん、ふううん……も、う……我慢なんて
出来ないよ……舐めちやう、舐めちやうから、
ねつ……」

「んじゅるう、じゅるる……がくまくま、がくまく
うううう、ぐがくう、ひもひも……ふうん、ん
ちゅ、ちゅうう……」

「ふああ……ひーー はつ、あひ……はあひつ……
ふーひ……ふうう……」

「ふうしつかな……あたし、すいじい興奮し
わやうじる……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「誰にでも、『んな』としてる訳じゃ、ないよ……」

「えく、えくへえ……身体の相性がいい、ひいうのかなあ……」

「なんだか、お兄さんとくつこくると……古キ、どんどんエッチになっちゃってるみたいい……」

「ふふふ……お兄さんが、オプション付けておいでくれて、よかったです……」

「だつてあたし……耳舐めてるだけじゃ、満足出来なかつたと思つ、もん……」

「ふ、ふあ、ああん……お兄さんも、準備万端、みたい……だね?」

「それじゃあ、」のまま……続けて、しちゃおつか……?」

「オフショノロースのお……おちんちんマッサージ……しあやづ……からねつ……?」

●トライック4

「ふふふ……ふう……ふう……」

「お兄さんのおちんちん、ズボンの中で、昔しそうにしている、ね……うふふ……」

「はあ、んひ……ビクンビクン動いて、まだ服の中なのに……」キ、すい「」、「ふんしゃう……」

「あたし、も……我慢出来ないしこ……お兄さんも苦しそうだから、脱がして……あげるから……ね……」

「えくく……脱が脱が、しましてねえ……」

「ふう、ん……くうん……」

「ふあ、あ……」

「お兄さんのおちんちん、もひ、」、「んにおひゃくになつてゐんだあ……」

「はあ、んう……もひ、おちがトロトロ出で……すすり」、「しちな匂い……」、「」

「お咲舐められてるだけで、そんなにおちんちん興奮しちやつてたんだね……」

「ん……お兄さんの舐れ田からあ……おち、もひ「ロアロア……」

「そ、えくく……指で、」、「ちやつてえ……シンシン、つてこしてただけ……量、すい「」、「とにかくなつてゐな……」

キ

キ

キ

キ

キ

キ

キ

キ

キ

「やつぱ、お兄さんの匂い、すいせい好き……
もつと、もつとHシチなお汁の匂い、嗅ぎたい
よお……」

「ね、ね……シロシロ、つていつぱいしてあげ
るからあ……Hシチな匂い、いつぱい嗅がせて
欲しいなあ……」

「えい、ふ……」おやつじゅく……擦るよつした
ひ、こつぱじ玉じて……くれるかな……

「はあ、えうう……熱い、ねい……それに、すつ
「」ごどぎどぎしてゐる……」

「ほおりあ……我慢しなくていいんだよ……もつ
とこつぱじお汁出しだ……ほりあ……」

「シロシロ、シロシロ……ふふ、おちんち
ん、どんぐりを直してきて……すいせいHシチ
な形にならせる……」

「あはあ……せひ、もつお部屋の中……むわあ
ふ、つむお兄さんのHシチな匂い、いつぱいに
なつてゐる……」

「いふなの嗅がされてて、まともぢりられる女
子なんて、いないよな……」

「もつ、ユキもおおかしくなりやつなくなへ
い、興奮しちやつてゐる……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「はあ、んい……♪コ♪ココの、先っぽお……美味
しゃつに震えてて……我慢なんて、出来ない
よお……」

「ね、ね……おちんちん、ペロペロして、こい
よね……」

「お兄さんのおちんちんを、口の口の中でもぐり
ぱりぱり咥えて……」

「唇で、『シ』『シ』抜きながら、じゅう、じゅう
う、う、う、おちんちん吸い取っちゃうの…
…」

「絶対氣持ちいいよ……お口まぐりでおちん
ちん扱かれて、お兄さんのセーラー、全部擦り
取っちゃうの……」

「う、う、う、お兄さん、シロシロされてて、もう答
えられない、氣持ちいいのかな……」

「でも、『れもオ』『シ』の内だからね……
答えてもらわなくとも、しゃう、からねつ……
…」

「えふ、えふ、えふ、じゅぱぱ……」

「えふ、えふ、えふ、じゅぱぱ……」

「ふう、んじゅる……お兄さんの……お口の中、入っちゃったあ……」

「んむ、ふあ、はあん……匂いも、す」かつたけ
ども……お口で味わうと、ほんと「れ……おか
しへなりをお……」

「んじゅう、ちゅ……んれる、ちゅぷう……
はあ、んはあ……」

「口の中、お兄さんの味で、いつぱいになつてえ
……意識、ぶつ飛んじゃいやお……」

「んううう、んう、んむ……れる、じゅう、
ちゅう……」

「はあ、んふう……カリ首の、裏あ……ちゅうと
しょつぱくじゅ……」

「ヒッチな味、たぐさんしつべるう……れるれ
るつ……んふう、ぶううんう……」

「舌に、触れるとお……頭フラフラしあやうべり
い、ピリピリしてくるう……ん、ふうう……」

「や、はあん……お兄さん、腰……突き出し
ちゃつてえ……」

「ふあ、はあ……先つぽだけじゃ、もどかしい、
かな……んふう、ふうう……」

「やつと隠く、匿えて欲しい……。やあん……
そんなにおちんちんつっこしり、おねだりし
なくともお……」

「ユキが、わづ我慢出来ないよね……」

「お兄ちゃんのおまんぽでえ……お口の中、犯され
るへりこに、酷暴にされたこいつ……思ひ
ちやうつけ……」

「はあ……はあ……じょ……お兄ちゃんも、眞持
ちよかいたる、腰、動かしと……」

「ユキの口まん」を、本物のおまんこ犯すみたい
にしり、じいせじおちんぽ出し入れして、いい
んだからねつ……」

「ふふふ、ふふふ……」

「ふむり、ふじゆるり……。じゅり、ちゅぶ
ぶつ、まむ、れわる、だまゆるり……。」

「はあ……はあ……おはあ……やの調子だよ、お
兄さん……」

「ふうふう、黙りこく、酷暴にじ……ユキの口
まえ」、沢山犯して……」

「ふうふ、ふじゆるり……。じゅるり……

……」

ユキ

「あたしも、たくさんチュッチュして、あげるか
りあ……」

「古、絡ませてぇ……お兄さんのおちんぽ、先つ
ぽか、根本まで、全部ペルペルしちゃうからあ
……」

「好きなよつこ、気持ちいいよつこ……ユキのお
口使つて……沢山、射精して……いいんだか
ら、ねつ……ア」

「くふう、くむつ……んじあるるひ、ちあるる
……ひゅうぱ、ちゅう……んくう、ひゅうひ、
くぎゅう……」

「れる、れのひ……ちゅうひ、ひゅうひ、
……」

「ふああ……ん、はああ……おちんぽ、抜け
ちやつたあ……」

「あやう、くうん……熱くて、ドロドロになつた
おちんぽ……ほつぺにスリスリしてうう……
……」

「えふ、えふ……ユキのよだれと、カウパー混
じつたくせあいお汁が、ほつぺ汚しちゃう……
……」

ユキ

「ふう……ぐうん……おちんちん、寂しそうにビクビク震えてるね……あはは……かわいい……」「♪」

「あ、ん……タマタマ、すついじギュ~ってなつてて、今、沢山精液作ってるんだねえ……」

「はむう、んつ……ぱくつ……んむ、れるう……」「…」

「んふつ……れるれる……ちゅ~ふ……タマタマやん、がんばれえ♪」

「ユキのおロヒローポー射精する、ドロドロ精液、たくさん作って、ね……んう……」「…」

「ちゅ~ぶ、ちゅ~ぶ……あむ、ちゅ……れろお……れる、れる……」「…」

「はあ、んう……えへへ……ベロドロタマタマ転がしてると……おちんぽが寂しそうに、つるつん、つて顔つけていくね……」「…」

「あううん……お兄さんつばば、おちんぽもタマタマも可愛くてえ……」「…」

「ユキ、どつちも弄りたくなつちや~へふふつ……」「…」

「ふう、ん……もお、おちんちん……限界、かな
……？」

「うふ……ユキ、もお……もひ、お兄さんの精
液、飲みたくてえ……限界、かも……」

「じゃあ……ラストスペード、だね……んくく……

「…

「おちんちん、壊れちゃう……ひく……強くしゃぶつ
てあげるからあ……」

「ふつでも、好きな時、にい……ユキのお口の中
……射精して、ね……♪」

「そ・れ・じ・や・あ……」

「あーん、んむ……」

「ふふふ、んじゅふ、じゅふ、ひみつ、あみつ、ん
じゅふ、ひみつ、ひみつ、ひみつ、ひみつ……」

「ふう、んんん……ん、んぶつ、ん
じゅふ、ちゅふ、じゅふ、じゅふ、じゅふ
うつ……」

「ふふ、んう、ふふ、ふふ、ふふ、ふふ
うつ、んじゅふ、ひみつ……」

ユキ

「あ、」…………「かーちゃん、」こんな…………まだ丑いね、
や…………うるさい、うるさい…………」

「んん……んんっ、んっ、はあ……はあ……」

「えへへ……おひーーかと、すいじゅう……だひだ、
ね……」

「多すぎて、飲みきれない、よお……ほら、見
てえ……」

「えうへ……」へな、いつまにいだひやれ、ちやうたあ……

「よーく、みてね、こひひ……♪」

「えぐ、えぐく……お兄さんの精液い……全部、飲んじゃったあ……」

「普通のお客さんじゃ、こんな」とまでも、してあげなーの?」

「ほんと、お兄さんとえりあな」として、ユキ、不思議なくらい、気持ちよくなつちやつたよお……」

「えと、あの、あのせ……ホントに、普通だったら、オプション付けでも、ここ終わり……なんだけどね?」

「あつ、えつと、ひひひ……お兄さんと、よければ……なんだけど……」

「……最後まで、シちゃんつ……?」

「お兄さんには絶対迷惑かけないからあ……ね、お願ひ……?」

「……いいの? うん、そだよね……おちんぽ、まだまだ元気、だしい……」

「お口に一回出しただけじゃ、満足出来ないよね……ユキだって、やうだし……」

「うふふ……それじゃあ、ユキの特別サービス……」

ユキ

「♪」

●トライック5

「はあ、ん……ふう、ふうう……ユキ、もひ……
こんなにフランフランしかやつてる……」

「フラン、してただけなのに……もひ、身体、
すつ」こ熱くなつわやつて、ちょつと叶つのも
辛いぐるぎ……ふふ……」

「ん、だいじょぶ……お兄さんは、そのままベッ
ドに、で、座つてて。」

「ふふふふ、ちやんと今から、ユキがパンツ脱ぐ
と」、見てて欲しいから」

「ふふふふん……、ほり、今下ろすから、よー^一
く見てて、ね……ふふふふ……」

「ふう、ん……スカートの中から、パンツが出て
きちゃいましたあ……」

「くす、自分でも恥ずかしくなつちやつて、
もつべトベトだねえ……」

「」のスカートの奥はあ……お兄さんのおかえぽ
ナメナメしてて興奮してえ……」

「ドロドロになつたおまんこが、早くお兄さん
に挿れて欲しいよ、って涙……」「うん、よだ
れ垂らしちやつてるの……♪」

「ぐすつ、おちんぽ跳ねたね？ 想像して、興奮
しちやつた？」

「それじやあ……ふふつ、ドロドロに蕩けたお
まんこ、お兄さんに見せてあげるね……」

「んんつ……くふ、ん……えへえ……すい」「う」と
になつてゐる、「……」「……」「……」

「おちんぽ舐めてただけなのに、パンツ脱いだ
らあ……」

「太ももが濡れちゃうくらい、エッチなお汁が垂
れて来ちやつてるう……」

「はあん……スースーするのと、お兄さんに見ら
れてるつての、変な感じしてえ……」

「まだ、なんにもしないのに……おまんこ」の
奥、なんだかドキドキしちやうよ……

「んふ……えへへ……お兄さん、さつき出した
ばっかりなのに、お口でしてた時よりももっと
大きくなつてゐみたい……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「我慢出来ない……？ はあ、はあ……それは、
ノキもねんねジだよお……」

「ふふつ、色氣も何にもないユーワクでカツ「悪
いさゞお……お兄さんのおちんぽ、ユキのおま
んこで、食べちゃつても……いい……?」

「……そんなの、言われなくともって顔してるね
……うん、そんじゃ……お兄さんの「」と、食べ
ちゃうからねえ……♪」

「それじゃあ……重かつたら」「めん、だけどお……
……ちょっと、失礼してえ……ん、しょ……」

「んふふ……お兄さんに、乗つかつちやつたあ…
…ん」

「動かないで、ヘーキだからね……ユキが、」のままおちんぽをお……中、に……挿れてあげるから……んん、ん……」

「あ、ん……先っぽ、があ……」**コキ**のおまん」に
当たつてゐる、んうう……はあ、んつ、んつ……

「うの、ままあ……中に、挿れちゃうからね、
んんり、おまんこの中あ……挿れちゃうから
ねつ……」「……

卷之二

「ひあ……はつ、ぐうう、はあ、あつ……はあ
……あんひ……」

「「れ、すい」……♪ 少し入っただけなのに、
ユキ、おまんこビクビクってしてえ……」

「えくく……軽く、イッちゃったかもお……
「きやうん」あは……お兄さんも、すいい
興奮してるとみたいだね……」

「ぐう、んじ……ユキの中で……どんどん大き
く、なつてくるわ……んあ、あつ……はあん……
……」

「す」「いね、「れ……おちんぽと、おまんこがピ
ッタリくつづいたやつてえ……」

「少し動くだけで、中のヒダヒダ刺激されちゃつ
てるわ……」

「「んなの、軽く動いただけで、何度もイッちゃ
いそお……」

「やあん……ユキ、お兄さんのおちんぽで突かれ
たら、壊れちゃうかも……」

「でも、いじよ……すい」「気持ちいいからあ……
……」

「おちんぽ、でえ……」**ユキ**の「と、壊してえ……？」

「あややかづかづか…… カヤカヤ、んく……」
「うんつ、ああんつ……」

「あつ、ひやあんつ……お兄さんつ、いきなり激
しつ、ひやうつ、あつ、あつ……」

「おちんちん、そんなに我慢出来なかつたの?
ユキのお口にあんなにビュービュー出したの
に、もう我慢出来なくなつちやつたの?」

「えつちちんぽ……口ちんぽ……ユキのちつ
ちゃんまん」犯して、そんな興奮してるんだ……
「…」

「んひ、んひ、ユキの身体、がつちり掴んでえ……
…そんな、オナホ犯してるみたいにして、腰振
るお猿さんになつちやうんだあ……?」

「ねえ、ねえ……口ちんぽ」気持ちいい? ハメ
てるのバレたら犯罪確定の、口ちんぽ「そんな
に気持ちいいんだ?」

「んひひい……いちわるいてるつもつなのに、
お兄さん、どんどん激しくなるねつ、んくつ、
んつ、はあつ、あつ……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「やつぱ、ユキい……お兄さんの」と、大好き…

2

「」んなにHロくし、あたしのおまんこにぴったりなおちんちん持つてるだなんて、素敵すぎる、よお……♪」

「くふうひ、んひ、あひ…………めやうひ、んひ…………
はあ、あひ、はあんひ…………んあひ、あひ…………
ああんひ…………」

「ひやうん……あつ、あつ……」
「キイ……ちよつ
と、腰、ぐうう……抜けちゃいなお……かもお
……はああ……」

「ん、あ……お兄さん、リードして、くれるの…」

「えへへえ……男として、責められてばかりはいられない……のかな……？」

「ん、うん……それじゃあ、お兄さんにおまかせ、します……」

「はあ……はあ……お兄さん、乗つかられ
ちやつたあ……」

「えへへ……」のカツコだと……なんだかお兄さんと恋人になっちゃったみたいで……なんだかドキドキしちゃう……」

「はう……あんま、顔見ないで……ユキ、今ちょ一変な顔になってるかも、だしい……」

「うう……お互い様って言われたら、そりなんだけども……」

「それでも、ユキの顔見ながら、したいんだ……。もう、お兄さん、ホントはエスなんじやないのぉ……」

「分かった……いいよ……ユキも、お兄さんの顔見ながら、したいし……」

「お兄さんが、ユキのおまんこズコズコしながらあ……たくさん感じてる顔見ながら、したいな……♪」

「んふふう……恥ずかしい、でしょ？　でも、顔逸しちゃ……嫌だからねつ……」

「ん、うん……あたしの方はもうだいじょぶ、だから……」のまま、突いて欲しいな……」

「くうんつ、あつ、はつ……あんつ、はつ、あんつ……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「お兄さんに動いてもらひうへ、ずん、ずん、って
おまん」突かれるの……」「れ、す！」

「ひやうへ、ひやうへ、もひと……いよへ、奥
までえ……ユキの一番深いところまでうへ、あん
ぽ突つ込んでえつ……」

「ひあへ、あへ、ひやうへ、んへ、んへ
うへ、もひと、強く、強くうへ……」

「子宮、形へ、変わっちゃうへうへ……、強
く、突いて、もひと、もひとおへ……」

「んじへ、あへ、あへ、はんへ、くううへ、んあ
あへ……、きやふへ、くううへ……」

「ふ、あへ……お、おふうへ……」「れ、
しゅうへ」「おまん」の奥からあ……お腹へ、
突き上げられていへ……」

「あやふへ、ふへ、くふへ、んふふへ……、お
兄さんの、腰の動きに……合わせてえ……」

「ユキの身体、持ち上げられちやうへ……、
ほんとに、ユキのあや」「お兄さんのあんぽ
扱ぐだけの穴になつちゃうへ……」

「ユキ、なうへ……オナホみたいに使われるの……
……あは、あへ、くへ、くへ……本當は、苦しい
へりいなの」「……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

「もう、おまんこ気持ちよくなりすぎちゃうんで
……もつと乱暴に、好きなように使って欲
しううう、ユキ、思つちやううー。」

「あつ、んあつ、あつ、あつ、あああつ！
あつ、はあんつ！ いいつ、いいよつ、お兄ち
んつ……！」

「もつとズバズバ、ユキのおまんこ突いてえつ、
好きなようにちんぽ刺激して、中にドロドロな
精液、いっぴに出してつー！」

「ほりつ、ほりあつー ちんぽブルブル震えて、
もう精液昇つて来てるよなつ、いいよつ、出しつ、
欲しいのつ」

「お兄さんのせーしつ、ほしつ、あつ、あつ！
グチヨグチヨになつたおまんこにいつ、孕ん
じゃうくらい」おいせーしつ、ズバズバズバ
しゃせーしつ！」

「んじつ、あつ、くわくわ、んひつ、や、きや
んつ、ひやああんつ、くあつ、うつ、あつ、は
ああつ、んいいいいつー！」

「出るつ、出るみなねつ、いいよつ、避妊とかどう
でもいいつ、欲しいつユキのまんこつ、せーし
欲しくてつ、切ないつ、切ないからあつー！」

二
半

「残ってるせーしひ、全部出してーー。お兄さん
のせーえきひ、ユキのまん」と、子宮に届くべ
らじしゃせーしてえー！」

「やつ、あつ、あつ、あつ、あつ！ ハハハハハ
ううう、んあああつ、ああああつ、あああああ
ああんつー。」

「ふぐつ、あつ、かはつ、んいつ、あつ、あつ！
でりゅつ、んつ、あつ！ でし、りゅつ、ん
おねつ、ねつ、くわくわくさんつ…」

「はひつ、んつ、はつ、はああんつ！ しゃ
せーつ、とまんなつ、まだつ、でてつ、ん
くつ、おつ、おつ……イクうううつ、ん
いつ……」「

「ひゃう……ん、ぐう、あああう……はあああ
ん、あ……あああう……しゃせー、とまん
なう、あう、あう……」「…」

「ホントのホントで、ちゃんと説明してあるとこ

あひつ、またイクつ、んおひ

ユキ

「中田……しゃれると……おひ、ほひ……イ
クの、とまんな……あああ、ん……あ
ひ、ひいん……」

ユキ

「んぐううう……はあ、はあ……あああ……
ふーつ、ふーつ……んお、お……はあ、はあ、
くうう、ふう……ふーつ……」

ユキ

「ん、あ……はあ……ああ……イクの、とま
りやないのに……おちんぽ、まだ『ユクビ』
クしてりゅう……はひ、ひいいん……」

ユキ

「はあ……はあ……ふううう……んう、う……
くうう……うううん……」

ユキ

「んきやう……お兄さん、大丈夫……?」

「あは……身体中、すううう真っ赤にしちやうて
……息も、あは……ほんと、マラソンでも走つ
たかうて感じ……」

ユキ

「うう、それはユキも同じ、かな……」

ユキ

「ふーつ……ふーつ……ほんと、」んなに夢中に
なるエッチなんて、初めてした……かもお……
…」

ユキ

「お兄さんの身体も、おちんぽさんも……えへ
く、ホントに素敵、だったよ……♪」

「ふつ……せやつへ、ふつ……ふくつ……

「はあ、ん……おちんぽさん、抜かれちやつたあ
……ちよつと、ひつひつ……寂しいなあ……なんてね♪」

「うわ、まだかっただい……ユキの身体で、そん
なに興奮してくれてたんだ、ね……」

「じゃあ、特別のアフターサービス、だよ♪」

「ん~……あむ、ちゅぶ……」

「えへへへ、現役っくの、お掃除フリーサービ
ス、してあげる、からね……んぶ、れる、
ちゅう……」

「ふふ……お尻さんのおちんぽお……精液と、ユ
キのお汁でびつぶつお……まむ、んちゅ、
ちゅ、ちゅう……」

「はあん……舐めてるだけで、またおまんこ疼い
て来ちゃいやつなくらい、だよ……すいし、H
ツチおちんぽさん……♪」

「あむ、れる、ちゅう……れるる、ちゅう……
カリの裏もお……血管の一本一本もお……お汁
でく、く、く、くだねえ……」

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

ユキ

二
三

「わねわね、じゅり、あみ……」キのペんペん
ド、ザーンぶ綺麗にしてあざあすからねえ……
んふふひ、ちゅひ……」

「さむ、んつ、れるる、んつ、ああむ……んれ
る、ちゅつ、ちゅつ……れるれる……んん……
れる、んちゅつ……」「……」

「ふふふ……」のまま耳元で囁かれるのかと
迷、ペロペロしたくな……。

「ユキ、自分が『』んなにエッチだなんて、初めて
知ったかも……えへへえ……」

●エピローグ

ユキ
「はい、お疲れ様」

「お兄さん、ユキのサービスは、楽しんでもらえたかな？」

「もてなす側のあたしが言うのもなんだけどね…
…ユキは、すう”ご”楽しかったよ……♪」

「えつ、エツチしたのは大丈夫か、だつて？」

「もう、そんな細かい」と氣にしたら、お兄さん老けちやうよ？ あはは」

「あ、でもお……バレたら、「キ……」のお店に、いられなくなっちゃうかもお……?」

ユキ

「だけど、ね。ちゃんと常連さんがついてて、しつかり稼いでたら、お店も強く言えないと思うんだ」

「だからね、お兄さん……」これからも、「のお店に通ってくれるよね?」

「ユキはお店辞めなくともいいし、お兄さんは気持ちいい思い出来るし、お互にウインウインだよね、あはは」

「えくへ……うううのは建前で……ホントはお兄さんと、もつともうと……」

「えつちな!」・「、したいって、思つちやつてるんだあ……」「…」

「ううう、お店の外じゃ、危ないしじ……ね、ね、まだ、来てくれるよね?」

「ユキ、お兄さんなしじやダメな女の子になっちゃつたかもだしい……ちゃんと責任、取つて欲しいな~?」

「ふふ、『めぐ』めぐ、ちょっと脅迫つぽかったね、『れ』でへへ……」「…」

「でも、また……お兄さんの氣が向いた時でいいからあ……また……」「…」

ユキ

「ナキ

「ナキのお母さんは……沢山イジメに来て、ね……」
「ううう……」

//END